

奥信濃文化

第 43 号
別刷

◆ 目 次 ◆

飯山仏師たちの作品（1）……………	佐藤 富夫 ……	1
小説を通じて郷土を知る、ある取り組みのお話 ……	藤田 温彦・理世 ……	5
寺町で育まれた人々（その3）……………	村松 和夫 ……	12
飯山の魅力～歴史と文学と地域おこしの近況～……………	藤木 義博 ……	23
○飯山市静間、大久保区の祭屋台と関連史跡について ……	松澤 芳宏 ……	27
お寺とお地藏さまと私……………	佐藤 富夫 ……	38
研究ノート 小菅神社奉納額絵「花鳥之図」について……………		40
市指定文化財「五束の宝篋印塔」の修繕について……………		44
あとがき		

2024年11月

飯山市ふるさと館友の会

飯山市静間、大久保区の祭屋台と関連史跡について

松澤芳宏

1. はじめに

明治中期以来、下水内秋津村静間（現飯山市大字静間）の大久保・中町・北畑の各組は祭屋台を有していました。当時、各組の競争で屋台を製作したようです。屋台製作には巨額の資金が必要であり、どうやって資金を調達したか、謎に包まれています。現在の山林の価値とは違い、当時は山林の恵みが大きな比重をしめていたものとも想像されます。

筆者の居所である現飯山市静間の大久保区の屋台は、明治22年、18歳前後の北村直次郎（のちの北村四海）が父親の北村正信（喜代松）にしたがって、弟子として、平坂八十松（のちの平坂芳文）らとともに製作したものです。

現大久保の丸山信之家の先祖の家（お医者さん）に、北村正信（建部正信からの3代正信）らが宿泊しました。そして、大久保組中央の中立て道の北側、飯山道（善光寺道）より少し西に入った



静間神社例大祭当日（2日目）に並んだ静間区3台の祭屋台、右手端が大久保区の屋台。

（2018年9月16日撮影）

ところで、小屋掛けして屋台製作に当たっていたと云われています。丸山家には世話になった御礼として譲り受けた矮鶏（ちゃぼ）の木彫が現存しています。なお、北畑区の屋台彫物も北村正信が付加したものと判明しています（注1）。



北村正信制作 「矮鶏」 明治 22 年前後作 木彫 丸山信之氏蔵
矮鶏本体底面に北村正信の銘が刻まれています。木彫高さ約 22・5 cm。

静間神社秋季例大祭に奉納される静間区（注 2）の 3 台の屋台は明治中期に揃えられたものですが、大正 13 年に静間神社として神社合祀があった以前は、それぞれの組（区）の氏神に屋台が奉納されていました。



大久保区の屋台の欄間の銘文。北村正信と門人平坂八十松・北村直次郎（正信実子でのちの四海）らの名が見えます。

因みに、北畑区は組の北西方の伊勢社（現屋台小屋のあるところ）、中町区は神社合祀前の神明社（伊勢社・現静間神社の所）、大久保区は組西方の大山祇社（山の神社）に奉納されていました。

また、蓮地区の場合は古来より、諏訪社と言っていましたが、元治 2 年（1865）社号を改称の許可を得て、明治 6 年村社の信国豊神社（しんこくゆたかのじんじゃ）が成立しました（秋津村誌）。

そして明治 34～39 年さらに蓮地区内の 4 社が信国豊神社に合祀されています。この、信国豊神社に中屋根・伍位野区と上組の 2 台の屋台が奉納されました。

2、北村一門の経歴

北村一門の経歴については、ほぼ同じ内容の、長野市鬼無里の山国文化伝承館の数十年前のパン

フレット『匠と芸術』と現在ウェブ上の『長野市商工会、鬼無里情報』があります(注3)。これら、北村正信らのプロフィールを要約したものを『 』に引用します。号北村正信は北村喜代松であり、越後市振村(現糸魚川市市振)の建部家の生まれです。

『北村喜代松(天保4年～明治39年)』

鬼無里ふるさと資料館に展示された祭屋台と神楽の彫刻はすべて北村喜代松(三代正信)が彫ったものです。越後市振村の宮大工建部家に生まれた喜代松は、18歳頃から鬼無里を訪れ、諏訪神社の屋台、鬼無里神社屋台、加茂神社の神楽などの製作に加わりました。

宮大工と大工の大きな違いは、彫刻技術です。腕の良い宮大工は一流の彫刻師であり、建部家は彫刻を得意とし、才に恵まれた喜代松は生粋の彫刻師に鍛えられました。喜代松は文久年間(1861～4)長野村(現長野市)の北村ふさ(鬼無里生まれ)の婿となり、建部姓から北村姓となりましたが、建部家の世襲名正信(三代)はその後も名乗りました。

それから15年経て故郷から新築寺社の彫刻師として招かれた喜代松は、仕上げた作品が評判で新潟・富山から仕事の依頼を受けて長野に戻れず、妻と4人の子は翌年市振の喜代松のもとへ向かいました。

北村 四海(明治4年～昭和2年)

喜代松の長男直次郎は早くから彫刻を継ぐ決心をかため、母の反対を押し切って小学校を中退しました。腕を磨き、20歳の頃には父の代参で長野・富山・新潟の社寺の彫刻補作に出向いています。

25歳の直次郎が鬼無里神社を訪れて彫った草刈童子が、東京彫工会主催彫刻競技会で一等褒状を受け、同年四海の号で日本美術院協会展に出品した木彫神武天皇像も一等賞になり、新進木彫家として最高の船出をしますが、その後、四海は木彫から轉身し大理石彫刻を独学で試みました。

その初作「少女像」が明治32年の日本美術院協会展二等賞となり、しかも念願であったフランス留学が、明治33年パリ万国博覧会視察の作家代表となることで実現します。四海は、翌年の帰国まで、ジョルジュ・バローのアトリエで学び、美術学校で解剖学の講義を熱心に聴講しました。

四海は、フランスの芸術運動に影響を受け、帰国後の彫刻では、流麗なフォルムと、清楚で美しく、憂うような女性像が評価を受けました。それらはまた、警官の裸体像取締りを、芸術性の高さで抗いだ四海の反骨魂をもうかがわせませす。』

因みに、裸体像の絵画で、芸術か否かで警官と問答をした作家では、黒田清輝が有名であり、明治期の美術界における二大エピソードとして語り継がれています。後に四海は、文部省美術展覧会審査員、帝国美術院展の彫刻部審査員を勤めました。

この他5代北村正信(明治23年～昭和55年)(四海の姉の子・虎井広吉で四海の養子・日展評議員・参与)の活躍が記述されていますが、本稿とは時代が異なるため割愛します。

以上が北村家関係記述ですが、大久保区屋台の銘文にある北村喜代松の弟子の平坂八十松(平坂芳文)については、ウェブ上の「北信濃寺社彫刻と宮彫師」(著者不明)の記述を次に『 』内に掲げます(注4)。

『文久3年(1862)～大正8年(1919)北村喜代松の弟子。文久3年に富山県下新川郡泊町(現朝日町)平柳の大工 柳下平左衛門の二男として出生(本名 弥三)。明治9(1877)～12年の頃に朝日村に来た北村喜代松の仕事を手伝うようになる。その後、喜代松について宮大工の仕事をして、

明治 22 年に平松文左衛門の養子になる（平坂性）。飯山市静間の大久保組の祭り屋台（明治 22）には、喜代松、平松八十吉（**実際は平坂八十松・松澤注記**）、北村直次郎の名が連名である。明治 28 年に上京し、島村俊明に弟子入りしようとするも島村俊明が没後であり、俊明の娘と結婚した吉田芳明に師事し牙彫を学ぶ。

明治 32 年（1899）には第 13 回東京彫工に出品。翌年明治 33 年にはパリ万国博覧会に出品。明治 40 年岡倉天心の日本彫刻会が結成され、明治 43 年の日本彫刻会展に出品。同年に富山に帰郷し、以降は亡くなるまで富山で過ごす。平坂姓は明治 22 年～、芳文名は明治 28 年～。***魚津章夫氏の「明治の謎の彫刻家 平坂芳文」を参考させて頂きました。』**

かつて、テレビ東京・2017 年 4 月 4 日放送の『開運！なんでも鑑定団』に平坂芳文作の高さ約 50cm の木彫が登場しました。

鑑定依頼人は吉田良子さんで、木彫には『無我』という銘があり、鑑定士大熊敏之氏は「大正 4 年前後の作品とみられ、無我というのは結局、無欲という事に通じるので竹取の翁と考えられます。

竹取物語自体が竹中生誕説話、要するにそこから無垢なものが生まれてくると、そういう仏教説話に材をとったのが日本彫刻会の特徴であります。そういう事も考えると非常に貴重な作品です。」と絶賛しました。

絵画を趣味としている筆者については、彫刻についての観賞眼はないのですが、芳文の『無我』を一見すると、慈愛に満ちた人間本来の好ましい姿を木彫に託したと見えてきます。

芳文（享年 57 歳）の晩年の作品とされているこの彫刻は、かつて北村正信同門の、北村四海らの海外に学んだ新風芸術隆盛の最中、木彫の伝統を受け継ぎ、写実に徹し、本来の人間味あふれることを彫刻に託した芳文の芸術意識が感ぜられる作品といえるのではないのでしょうか。平坂芳文も明治・大正期の彫刻界の代表的作家であることは間違いありません。

以上、これまでの記述のように、3 氏は明治・大正期の彫刻界を代表する作家であり、3 氏の共同制作である大久保区の祭屋台の彫刻はまさに彫刻界の金字塔でありましょう。

彫刻は欄間・柱脇・舞台天井・屋根破風下部の各所に及び、鳳凰・丸龍・中国史故事に関連する縁起物など多岐にわたっています。特に舞台天井の丸龍の彫刻は天井板に、はめ込み式の優品で、前記した『開運！なんでも鑑定団』にも大きく紹介されました。



大久保区祭屋台の舞台天井の丸龍木彫・櫨製。
木彫直径 118 cm ・高さ 16 cm。

3、静間神社秋季例大祭の屋台奉納

静間神社秋季例大祭の屋台奉納行事は大正13年に静間村の各社を合祀した静間神社が成立した時以後から行われております。それ以前はそれぞれの組の社に屋台が曳かれていることは前にも記

しました。

静間神社秋季例大祭の様子については、やや年次が遡りますが、平成22年(2010年)9月18(土)・19日の様子について述べて行きたいと思います。

祭は2日間で、前日は夜宮で屋台奉納行事、2日目は例大祭当日であり、飯山市有尾の飯笠山神社宮司様ら神主様らと静間区役員による神事が執り行われました。

お盆過ぎからお祭日前日まで、各区では若連による準備と小中学生による獅子舞や薙刀・笛太鼓など楽隊の練習がありました。夜宮(前夜祭)当日は午前中に、住民で屋



急坂をひき上げる中町区の屋台 2010・9・18

台の組み立て、旗竿の設置が行われました。

屋台は1層2輪型式で、4輪型式よりもカーブの回転がスムーズであることから秋津地区の5台の屋台はすべてこの型式を採用しています。欄干に囲まれた車上部分は前面の舞台と後ろの楽隊部屋に分かれています。楽隊は笛・太鼓・小太鼓・鼓で構成され、区の小中学生によって演奏されています。その昔は三味線も加わっていたと云われています。

舞台には古くは農作業の様子など豊作を祈る人形が制作、飾られていましたが、昭和期後半以降は時の話題事項や漫画のキャラクターが登場しています。

夜になると大久保の場合は区の交流センターで(古くは静観庵で)、薙刀舞・獅子舞が簡単に行われ、そのあと静観庵前を屋台行列が出発しました。静間神社への道中、区民や観客が総出で屋台を曳きます。途中の各所で薙刀も舞いました。

静間神社境内は、『保元物語』や『平家物語』に登場する静妻(志津摩・志妻・志津間・閑妻)

氏館跡と伝承される場所であり(注5)、小高い丘にあります。神社入り口の急坂を、屋台を苦勞して引き上げます。各区からの応援もあり、「よいしょ、よいしょ」の掛け声が周囲に響き渡り、祭りは最高潮に達します。

このように、3台の屋台を実際に祭りで使用しているところは珍しいでしょう。秋津地区では、蓮地区の2台の屋台を含めて計5台の屋台が、平成4年に飯山市有形民俗文化財(注6)に指定されています。



屋台曳き終了 2010・9・19

拝殿の左手に接し、祭りのときだけ舞台が組み立てられます。夜宮と大祭当日に薙刀・獅子舞・神田囃子（かんだばやし）などが奉納されました。例大祭の神事は有尾の飯笠山神社宮司様ら神主様と役員により2日目午前中に終了いたしました。

午後の奉納行事が終わると、屋台のひき下げが始まり、各区に分かれて戻ってゆきます。大久保区の場合は静観庵の前で屋台曳きが終わり、祭りが終了します。若連から、「ご協力ありがとうございました」の挨拶があり、飴をまきます。大人も子供も我先にと飴を拾いました。

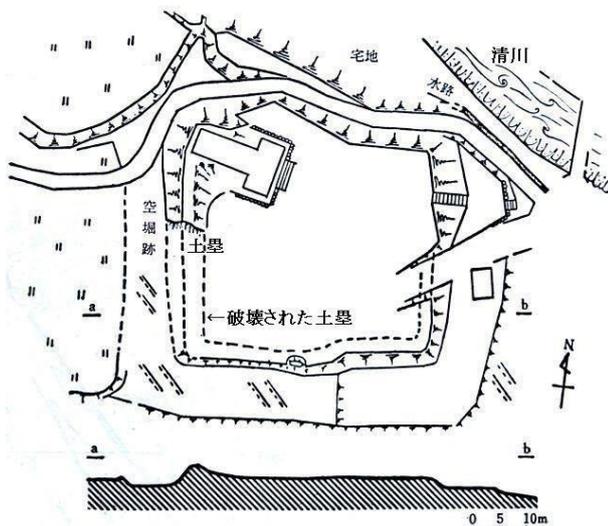
この後、屋台の解体・収納や、旗竿の収納が若連や区民により行われ、終了後に慰労会が行われました。因みに、大久保区の屋台小屋は大正13年の神社合祀後、不要となった大山祇社（通称山の神社）の拝殿を移築したものです。

4、静間神社と伝静間氏館跡について

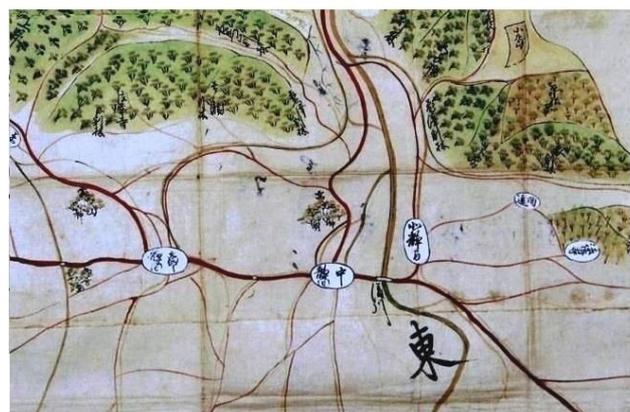
屋台を奉納する静間神社とその敷地である伝静間氏館跡については、筆者が静間区長であった平成24年に静間区と静間神社を統括する神主様と役員の総意のもとに、説明看板が設置されました。内容は筆者が作成し（注7）、関係者の了承を得たものであるため、次に同じ内容のものを、文体や配置をかえて掲げてみます。

『当該の静間神社境内は静間小太郎館跡と伝承されていますが、静間小太郎についての史料は現存していません。ただし、関連の静妻（志津摩・志妻・志津間・閑妻）氏については『保元物語』や『平家物語』などの「軍記物語」に散見し、平安末期の静妻氏の存在は明らかでしょう。

NHK放送のテレビ番組「平清盛」でおなじみの保元の乱（1156）を記す『保元物語』では



静間館（静間神社館跡・伝静間氏館跡）実測図
雑誌『高井』40号 昭和52年刊行より転載



静間区蔵元禄8年静間村絵図部分

現静間神社敷地に神明社が見えるが、諏訪社の社殿は途絶えていた。元禄8年(1695)以後に諏訪社の社殿が復活したとみられる。

平清盛と同様、後白河天皇方としての源義朝の配下に志津摩太郎・同小次郎（各写本により字は異なる）などが見えます。また、『平家物語』には越後の平家党の城氏の配下に閑妻六郎が見えるが、善光寺平の横田川原合戦で城氏が源氏の本曾義仲に敗退し、静妻氏も衰退したと推察されます。

清川の対岸のやや下るところには北畑館があり、伝承では小倉四郎太夫の館とありますが、静妻

氏との関連については明らかではありません。これらの館跡は支配下の集落や水田地帯を一望する高台にあり、静妻氏以降も若槻新庄静妻郷の地頭やその代官が居住することがあったであろうし、甲越合戦時代には飯山城の防衛線としてこれらの館跡が利用された可能性もあります。

したがって、厳密には現在の静間神社境内が平安末期の館の遺構を残しているとは断定できませんが、神社敷地には土塁が現存し、以前は館跡の西・南・東に廻っており、その外側に空堀の跡も散見しました。館跡東側の郷倉の西では箱堀状の空堀が発掘調査されています。

古来より武将の館跡として村の要であったこの地が、安土桃山時代ごろには神社敷地となり、江戸初期には諏訪社・神明社（伊勢社）の二社が飯山城代の皆川氏より神領寄進や安堵を受けています。その後、江戸後期以降に諏訪社が現中町交流センター敷地に移り、明治時代には静間村社となっていました。

ただし、現静間神社の建物は中町組の神明社として引き継がれ、明治42年に田草神社・屋敷諏訪社が静間村社諏訪社に合祀され、大正13年に無格社伊勢社（現館跡の中町組氏神で神明社とも言う）に村社諏訪社・大山祇社（大久保組の山の神社）・無格社伊勢社（字松尾の北畑組氏神）が合祀されました。

すなわち、上記6社が合祀されて、静間神社と改称されたのであります。なお、その他に数社が合祀されているかは不明です。静間神社の本殿は安政4年（1857）再建伊勢社の建築物、祝詞（のりと）殿は大正13年の建立、拝殿は建築年代不詳です。

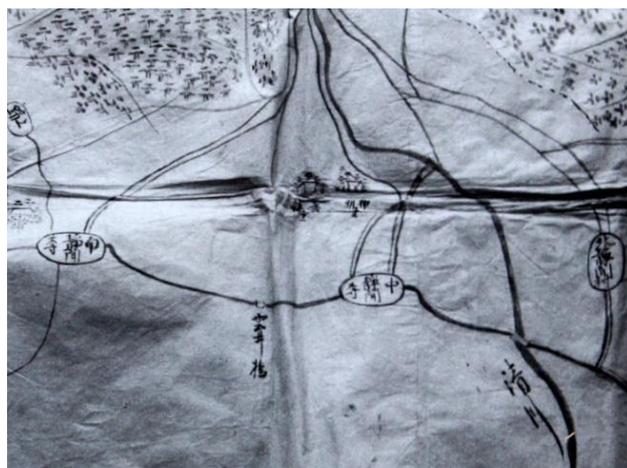


静間神社境内正面景観
(伝静間小太郎館跡)

なお、昭和50年代の聞き取りでは、静間神社門前の3祠については、南から館跡土塁上にあった祠・中町区梨の木地籍のおっちゃんじ（御石神か？）からの祠・中町区水野氏宅から移動された祠となっています。

毎年9月第3土曜日・日曜日に行われる静間神社例大祭は3台の屋台が繰り出し、老若男女こぞって屋台曳きに当たります。笛太鼓の伝統音楽を奏で、提灯がゆれる屋台の様子は、近隣地域のみならず、県内でも特色ある祭りとなっています。ちなみに、屋台は蓮地区のものと同様、飯山市の有形民俗文化財となっています。

以上のように、静間神社は先住民の歴史の中に鎮座し、地域の良民の信仰の要であり、住民同志



坪根秀一氏蔵江戸後期静間村絵図部分

江戸中期～後期に諏訪社社殿が復活している。ただし明和6年(1769)に諏訪社の社地替え再建があった。



静間神社側面

の連携を深める場所でもあります。(平成24年9月吉日 文責静間区および静間神社)』

5、合祀された静間神社以前の大山祇社について

以上、飯山市静間大久保区の祭屋台や奉納する静間神社について記してまいりました。しかし、静間神社に合祀される以前は大久保区については区西方の大山祇社に屋台が奉納されていたので、大山祇社と並立する狩田社について、述べて行きたいと思います。

この一帯は古くから大久保集落(南静間村)の鎮守で、元禄八年(1695)静間村絵図に山神(大山祇社)の記載があり、享保2年(1717)『静間村指出張』に山神宮があります。

神社西方に隣接するところに長野県宝の魚形線刻画土器(縄文晩期)で知られる山の神遺跡(大字静間字法花寺)があります。



大久保区の屋台小屋(大山祇社拝殿を移転)

近代では、大正13年まで、大山祇社(おおやまつみしゃ)・秋葉社・狩田社の三社殿がありましたが(注8)、同年10月、大山祇社が中町集落の神明社に静間の各社と共に合祀されました。合祀された神社は静間神社と改称されました。

以後、合祀されなかった当地の狩田社が、大久保区長を祭主として春祭りが行われていますし、さらに秋葉社が火伏祭りとして、若連によって祭祀が復活していました。

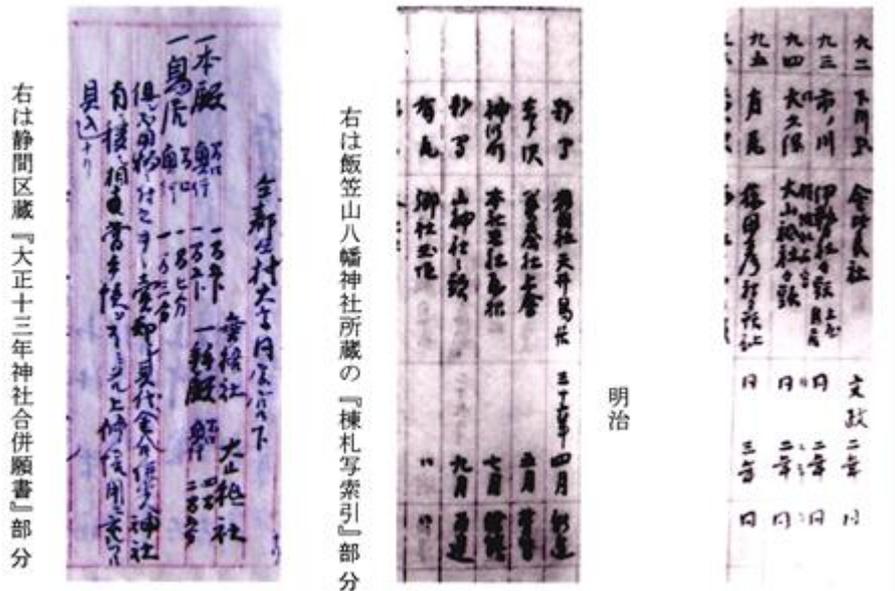
狩田神社(狩田大明神)は、子宝の神や子供の夜尿症や婦人病を治す神として知られ、祭神は男根形の石製品です。

参拝者が奉納したものが大半ですが、中には縄文時代の石棒があり、蓮の五里久保遺跡の出土品ともいわれているし、当地の西側の山の神遺跡からも石棒が採集されています。

なお、狩田や雁田の名は性器崇拝の対象にした石棒類の神、すなわち石神に関係した名称と思われる、石神そのものが祭神地として残っている所もあります。静間の中町区西方の梨の木地籍の「おっしゃんじ」の地名も御石神(おしゃくじん・おしゃもじ等と訛る)の地名からきたものと考えられます。

昭和44年5月、大久保区の狩田神社は天井絵もあった旧社殿が老朽化のために取り壊され、ブロック造りとなって現在に至っています。

ちなみに、大山祇社の宮殿(くうでん・御社頭)は文政2年(1819)に再建された記録があ



右は静間区蔵『大正十三年神社合併願書』部分

右は飯笠山八幡神社所蔵の『棟札写索引』部分

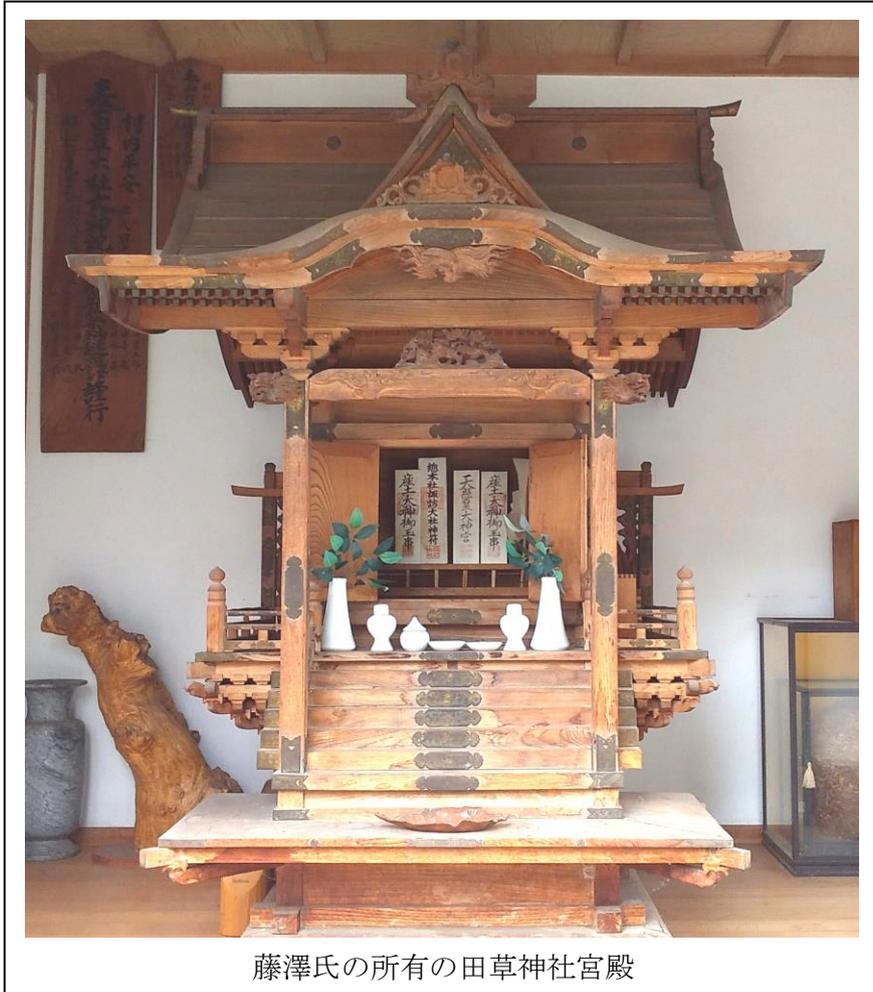
明治

り、文政3年に古い宮殿は、有尾の飯笠山神社の猿田彦社の上屋として移転され、現存しています（注9）。

また、大正13年の静間神社合祀後、大山祇社の拝殿（上屋・注9によると嘉永4年再建）は昭和6年に大久保区の灯籠部屋（屋台小屋）として移転され、南側は増築されています。

大山祇社々頭は明治36年に再建されたものを、大正13年の神社合祀後、田草神社の宮殿として移転され、田草神社の廃止の後、荒舟区の藤澤初次郎氏の屋敷に移転したとされています。

藤澤氏が所有する宮殿（社頭）の破風付近は大久保区等の屋台の破風付近と同じ様式であり、同宮殿は北村氏の一門が制作したのか否か調査が必要です。



藤澤氏の所有の田草神社宮殿

因みに、藤澤氏の宮殿上屋には田草神社に関する二つの棟札があり、大久保区大山祇社宮殿からに関するものには昭和二年九月十九日の年号とともに「奉御内宮清祓祭々主風間美奈登謹行」などの文字が見え、一方のものには同年同日の文字と「奉田草六社大神祝詞殿新築御遷座祭々主風間美奈登謹行」などの文字が見えます。

つまり、田草区に再建された田草神社は、かつての八幡社とは異なる田草六社大神であり、大正13年から間もない昭和2年に祝詞殿（上屋）が新築され、御内宮（宮殿）は大久保区の大山祇社宮殿を用い、清め祓い祭が行われたことが判

明します。但し、図に掲げてある静間区蔵『大正十三年神社合併願書』の間口一間半の無格社大山祇社本殿（大久保区）は宮殿を現しているとすれば、間口一間に満たない藤澤氏所有宮殿とは寸法が合いません。本殿とあるのが宮殿の上屋であれば、寸法の矛盾はなくなります。

6、祭の楽曲について

本当は、秋津地区全体の祭の楽曲に触れればよかったのですが、何しろ専門外で研究不十分であり、静間区と区内の大久保区について触れてみます。

まず獅子舞についてですが、獅子舞には男・女の区別があります。大久保区は女獅子、北畑区・中町区は男獅子と教わってきました。ところが、男獅子は鼻が赤く、女獅子は黒いとのことで修正

が必要となりました。以前、雄・雌の区別を、各区に問うと、女獅子と返答される方が多かったです。ところが、北畑区で獅子頭の塗り替えをお願いしたところ、業者から男獅子といわれて、実情が判明したとのことです。大久保区も鼻が赤く男獅子の様です。

獅子舞がいつごろから始まったかについては、江戸時代は確実でしょう。大久保区の若連には『柳樽獅子の由来』という古文書の巻物が存在していました。内容は難しいが、故佐藤政男先生の解説によると十一面観音との結びつきが判明しました。つまり、神様に奉納する獅子舞が仏教と結びついていたのです。

明治時代以前の神仏混淆の習わしを示し、そのことから江戸時代の獅子舞の存在が明らかでしょう。そういえば、昔は公会堂ではなく、十一面観音様を本尊とする静観庵本堂で薙刀・獅子舞を舞ってからお宮に出発したのです。

北畑・中町区の獅子舞がやや共通し、大久保区の獅子舞が独特の趣があるのは、中町・北畑集落（中静間村・北静間村）の開拓が古く、大久保区（南静間村）の開拓がおそらく安土・桃山時代を中心に始まったのに関連があるかもしれません。

そういうことであれば、江戸時代以前の獅子舞の歴史が紐解けるかもしれません。楽曲ももちろんです。今後の課題と言えましょう。

また、3区には、**お囃子**という笛太鼓の楽曲もあります。大久保区は神田囃子・やたら囃子・本囃子などがあります。神田囃子・やたら囃子は3区に共通し、静間神社秋季例大祭には3区から神田囃子が奉納されます。文字通り豊作を祈った楽曲といえましょう。

屋台巡行の曲については、かつて私が若き頃、若連の笛の師匠をやっていたところ、ある人から注意を受けました。「屋台の巡行に伴う楽隊曲について、1番～3番と続いて吹いているが、それはそれぞれ違う曲だ、1番ならそれだけ吹いていけばよい。それぞれ何々と名前がついている。」と言われ、軍歌らしい曲名をあげました。当時あまり興味がなかったので、うかつにも曲名を筆記するのを怠りました。

大久保の1番という曲は中町・北畑にも共通しています。北畑区では太平洋戦争後、軍歌禁止の風潮の最中、曲を少しアレンジして源義経の詩に合わせたと聞いています。大久保区は軍歌だと分からずに演奏していました。

戦後、平和の時代になぜ軍歌といわれがちですが、例えば大久保の楽隊一番という曲は私の考えでは明治38年（1905）日露戦争時に軍と国内の民衆に拮がった『戦友』という歌に近い気もします。若干のアレンジはあるが、ベースは同じものと感じました。

『ここは御国を何百里、離れて遠き満州の、赤い夕陽に照らされて、友は野末の石の下。……。』これは何と悲しい曲でしょうか、太平洋戦争時には軍隊に合わないと言われ禁止された歌であるとのことですが、戦友の戦死にあたって、この時ばかりは歌わしてくれと、ひそかに軍隊で歌い継がれたものとされています。昭和20年も終戦直後生まれの私の耳にもこの歌が聞こえておりました。

この歌は、むなしい戦争の悲しさ現す歴史の歌とも理解できるのではないのでしょうか。私の考えでは、戦死した兵士の鎮魂の歌、歴史を告げる歌、平和を考える曲としてこのまま続けていったらよいと思います。

7、おわりに

ここまで、大久保区の祭屋台を中心に、静間神社秋季例大祭の様子や関連する神社史跡について、触れてきました。やや本題とはずれた記述があることはお許しください。文体は整わずとも、蛇足事項が何らかの役にたつことを願っています。

また、触れることができなかつた中町区や北畑区の屋台や祭事については、それぞれの区の識者の発表を待ちたいと思います。

ともかくも、年1回、静間神社に集まる例大祭と屋台奉納行事は静間区の区民全員の協力のもとに行われることに意義があり、全員が参加する親睦の場でもあります。また飯山市内における、特異な祭行事として、観光振興の立場からも意義深いものがあります。

ここ数年は、コロナ蔓延のため屋台奉納が控えられてきたことは残念ですが、かつてのように豪壮な屋台奉納行事が再開することを区民の一人として期待しています。

参考文献

- (注1) 北畑区屋台の正面欄間裏に「越後国西頸城郡 市振村 北村正信」と刻まれています。岩淵敦「北信地方にみられる屋台の姿とその背景（飯山市静間を事例として）」信州大学工学部社会開発工学・土本研究室・平成19年前後出版にも明らかにされています。このほか平成18年の土本研究室による3台の屋台の正確な実測図・静間神社の社殿図や例大祭の細部などが詳述されています。
- (注2) 静間区とは江戸時代の信州水内郡静間村の後身で、主に清川水系にある大区で、共有の山林・用水堰の管理や静間神社の祭祀を執り行っています。現在、飯山市大字静間の数区からなっていますが、別に新田村に起因する区や新興住宅区は大字静間にあっても、静間区には含まれていません。
- (注3) 長野市鬼無里の山国文化伝承館の数十年前のパンフレット『匠と芸術』と現在ウェブ上の『長野市商工会、鬼無里情報』。
- (注4) ウェブ上の「北信濃寺社彫刻と宮彫師」（著者不明）。
- (注5) 松澤芳宏「飯山市静間の二つの館跡」『高井40号』所載 昭和52年。
- (注6) 『改訂版 飯山市の文化財 長野県飯山市』令和6年3月29日発行。
- (注7) 松澤芳宏『静間神社合併史』平成18年・飯山市立図書館蔵などの書物を参考にしています。因みに、明治42年に村社諏訪社に合祀の田草神社は旧八幡社です。
- (注8) 「狩田社」飯山市教育委員会編『飯山の文化財』昭和46年。
- (注9) 飯山市有尾、飯笠山神社蔵『棟札写索引』。

令和6年9月初旬脱稿

(まつざわ・よしひろ 飯山市秋津地区在住)